

4. ゆり

・殺菌剤

FRACコード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
M5	ダコニール1000	散布	発病前～発病初期	6回以内	
1	トップジンM水和剤	散布	-	5回以内	
19	ポリオキシンAL水溶剤	散布	発病初期	8回以内	

・殺菌剤（参考農薬）

FRACコード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
9	フルピカフロアブル	散布	発病初期	5回以内	

・殺虫剤

IRACコード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
4	アドマイヤーフロアブル	散布	発生初期	5回以内	花き類・観葉植物(きくを除く)
1	オルトラン水和剤	散布	発生初期	5回以内	花き類・観葉植物
1	マラソン乳剤	散布	発生初期	6回以内	花き類・観葉植物

・殺虫剤（参考農薬）

IRACコード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
1	オルトラン粒剤	株元散布	発生初期	5回以内	花き類・観葉植物(きく、宿根スイーツ、カーネーション、アリカラム、たであいを除く)
4	ベストガード粒剤	生育期株元散布	発生初期	4回以内	花き類・観葉植物(きく、キンセンカを除く)
4	モスピラン顆粒水溶剤	散布	発生初期	5回以内	花き類・観葉植物(ストック、りんどうを除く)

- 注1) 使用回数はその薬剤の使用回数を記載しており、この他に薬剤に含まれる成分毎に、総使用回数が決められているので、農薬ラベル等を確認してそれを超えないように注意する。
- 注2) 薬剤抵抗性の出現を防ぐため、「FRACコード」や「IRACコード」を参考にしながら他系統剤とのローテーション使用を心掛ける（「薬剤抵抗性管理」参照）。
- 注3) 農薬登録上の作物名が標記の作物名と異なる場合、備考欄に記載した。
- 注4) 蚕毒・魚毒については、「24. 花き類の総括注意」も参照する。

病害虫名（F：菌類病、B：細菌病、V：ウイルス病、O：その他の病原体）

病害虫名	防除時期	防除方法	注意事項
疫病 (F)		1. 連作ができる限り避ける。 2. 前作の発病株残さは、ほ場外に埋却する。	1. 土壤が過湿になり過ぎないように注意する。
葉枯病 (F)	5月～10月	1. 施設内が過湿にならないよう密植を避け、換気する。 2. 発病を見たら、直ちに罹病部を除去し、薬剤を散布する。 3. ダコニール1000の1,000倍液、トップジンM水和剤1,500倍液、ポリオキシンAL水溶剤2,500倍液のいずれかを散布する。 [参考農薬] 1. フルピカプロアブル2,000倍液を散布する。	1. 薬剤耐性菌の出現を避けるため、同一系統剤を運用せず、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。
ウイルス性病害 (V)	生育期間	1. ウィルス感染苗による伝播は広範囲に及ぶため、ウィルスフリー苗を用いる。 2. アブラムシ類防除のため、アブラムシ類の項、又は「21. 花き類・観葉植物」の項を参考に、定期的に殺虫剤を散布する。 3. ハウス周辺の雑草は伝染源になるので除草する。 4. 罹病株から順次、二次伝染が起こるので、発病株は早期に抜き取り、ほ場外に埋却する。	1. 育苗時の感染に厳重注意する。 2. ゆりに発生している県内の主要なウイルスは、CMV、LSV、LMoVである。
アブラムシ類 (ウイルス媒介)	8月～10月	1. オルトラン水和剤1,000倍液、アドマイヤーフロアブル、マラソン乳剤の2,000倍液のいずれかを散布する。 [参考農薬] 1. オルトラン粒剤を10a当たり3～6kg、又はベストガード粒剤を1株当たり1～2gを株元散布する。 2. モスピラン顆粒水溶剤4,000倍液を散布する。	1. ウィルス発病株は抜き取る。 2. アドマイヤー、モスピランは蚕毒に特に注意する（特別指導事項参照）。
ネダニ	定植前	1. 球根は45℃の温湯に60分間浸漬する。	1. 常発地では連作しない。 2. 定植に際し、堆肥と球根が接触しないように注意する。
コウモリガ	生育期間	1. 被害株は見つけ次第取り除き、食入幼虫を捕殺する。	